

随想

日本人はダメになってしまったのか?!

時代を拓くエネルギーを身に付けよ!)

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

業界では《人手不足》の悲鳴が高い。過日、インターネット情報で『新卒学生は大企業を目指すべき!』なぜなら、企業の人材基盤が中小企業と大企業では本質的に異なり、中小企業の人材レベルは低い。また、パワハラは多

くは中小企業で起きている。《若者はひたすら、大企業を目指さず、個性を伸ばせる可能性の高い中小企業を選ばべき!》という意見がよく聞かれるが、中小企業への就職で失望することが多い。やはり、大企業こそ目指すべき方向である』という意見記事があった。中小企業サイドに身を置く著者は、この意見には大いに不愉快に感じた。海外出張のつれづれに読んだ《上級国民、下級国民(副題:やつぱり本当だった。みんな薄々

気づいている「言ってはいけない」分断の正体》橋玲著、小学館発行に気になる記述があった。今の若者気質の分析資料として、内容の一部を紹介して考察してみたい。

まず《上級国民・下級国民》の定義だが、二〇一五年の東京オリンピックエンブレム募集に際して著名なグラフィックデザイナーの作品が海外の劇場のロゴに似ていると指摘された。次いでこのデザイナーの過去の作品の盗用疑惑に発展した事件において、その審査委員長(日本の著名なグラフィックデザイナー)が「専門家の間ではわかるのだが一般国民にはわかりにくい」等と発言。この《一般国民》に対して《上級国民》という表現が急速に広がった(ここにこの大百科上級国民の

項。当初の《専門家/非専門家》というネットスラングが拡散し、日本社会を支配する上級国民と搾取される下級国民と定義され、多くの《下級と考える人たち》から怨嗟の声が発せられた。ちなみに、今年の二〇連休に対して、ツイッターに以下のような発言があふれた《ラムニスト・オバタカスユキ氏・NEWSポストセブン》。

- 羽田行きモノレールが二〇連休を旅行で過ごす上級国民様で満たされている
- 二〇連休なんて上級国民様のものでしかないのです。下級国民は労働奉仕なのです(震え)
- 給料総額一五万円、週六日働いて稼働日数月二五日。盆正月関係なし。ほとんど奴隷と同じです。きつと公務員やNH

Kに勤めている上級国民の皆さんには理解できないだろうな。ここでオバタさんが指摘するのは《上級国民》はエリートやセレブ、上層階級とはニュアンスが異なるという。ここでいうエリート・セレブは《努力して実現する目標》であり、上級国民・下級国民は個人の努力では越えられない自然法則のようなモノとされている。いったん下級に落ちると下級国民としての人生しか許されず、幸福な人生は上級国民だけ:これが現代日本社会を生きる多くの人たちの本音だという。

本編の前に《目次》から、気になるポイントを挙げてみる。
◆平成で起きたこと
●日本のサラリーマンは世界で一番会社を憎んでいる

ついで、私見を交えて紹介したい。

●日本のサラリーマンは世界で一番会社を憎んでいる...世界二二か国で日本のサラリーマンのエンゲージメント(EGII会社への関与度合い、仕事との感情的繋がりを評価する基準)はトップがインド二五%、メキシコ二九%、アメリカ一%、そして日本は最下位のマイナスイ三三%。年間労働時間は一九八〇年代二、〇〇〇時間を超えていたが二〇一五年には、七一九時間まで減少している。それでも二五、六四才の日本のサラリーマンは世界で最も長い労働をしている。非正規労働者の労働短縮でしわ寄せが正規労働者に来ていること、日本の労働生産性がアメリカの二/三しかないことによる。これは、《日本型年功序列・終身雇用等が日本人を幸福にしてきた》という主張と大きく矛盾して、日本型労働こそ日本を不幸にした元凶。

低下(その後一・七%に回復)。その二因として次の要件があると思われる(牛尾京司氏・失われた二〇年と日本経済構造的原因と再生への原動力の解明・日経新聞出版社)。一九九〇年に最も生産性の低い四万二、四七五工場が二〇〇三年までに三万二、〇二七閉鎖(閉鎖率七三・〇二%)。これは世界共通現象であるが、日本では同期間で生産性の高かった工場でも四万二、四三六から二万七工場が閉鎖されている(閉鎖率四七・二五%)。新設工場の増加から減少数を引いた実減で二/三になっている。生産性の高い工場では市場占有率が高いため、規模を勘案した加重平均での生産性は大きく損なわれている。

批判は到底受け入れられなかったため、社会がゆがんでしまった。文章を引用すると長くなるため、筆者の要約を紹介した。解釈の異なる点はご容赦頂きたい。筆者がこの書物を紹介したくなったのは《現在の若者の構成する現代日本が、モノにあふれている割合には、アジアの他国に比べて収入や生活環境の不均衡性の拡大による不満感が大きい》と感じられるからである。筆者が感じる若者の不満感を生きるエネルギー不足によるものと感じられてならない。筆者らの世代以前(第二次大戦以降に社会の再構成を担った世代)は、右肩上がりの経済発展を背景に感じ、それに押されて適進していた。ハングリーであったのである。筆者は《実際ハングリーな時にハングリー精神を持つのはたやすい。モノに満たされた環境でハングリーであるためには自分に厳しくなければならぬ》と後継者に語ってきた。著者自身若くはないが、今もこの思いでわが道を拓いてゆきたい。

- 急落したGDP成長率
- 生産性の高い工場も閉鎖されている?
- 経済低迷の理由は「日本市場に魅力がない」から
- ◆令和で起きること
- パラサイト・シングルが発見
- 不都合なことはすべて若者の責任
- 守られた「おっさん」の既得権
- ◆令和の最初の二〇年で、起きること
- ◆『モテ』と『非モテ』の分断
- ◆リベラル化する世界
- ◆リバタリアンとドスメティックス
- ◆エピソード

それぞれを紹介する紙幅はないので、興味ある読者諸氏はご自身で通読頂きたい。ここでは◆平成で起きたこと①の中から、●日本のサラリーマンは世界で一番会社を憎んでいる、●急落したGDP成長率、●生産性の高い工場も閉鎖されている?、◆令和で起きること②の中で、●不都合なことはすべて若者の責任、●守られた『おっさん』の既得権という部分に

気がついている「言ってはいけない」分断の正体》橋玲著、小学館発行に気になる記述があった。今の若者気質の分析資料として、内容の一部を紹介して考察してみたい。

まず《上級国民・下級国民》の定義だが、二〇一五年の東京オリンピックエンブレム募集に際して著名なグラフィックデザイナーの作品が海外の劇場のロゴに似ていると指摘された。次いでこのデザイナーの過去の作品の盗用疑惑に発展した事件において、その審査委員長(日本の著名なグラフィックデザイナー)が「専門家の間ではわかるのだが一般国民にはわかりにくい」等と発言。この《一般国民》に対して《上級国民》という表現が急速に広がった(ここにこの大百科上級国民の